

### 進歩する（社団法人）日本薬剤学会

杉林堅次

（城西大学薬学部）

#### 1) 本学会の使命

社団法人日本薬剤学会は、HP に書かれているように、薬剤学の進歩および普及をはかり科学、技術、文化の発展に寄与することを使命としている。ここで、薬剤学とは、医薬品が安全に、有効に、かつ使いやすく設計されることにより、すべての人々の健康な生活を確保するための学問である。そのため、本学会は薬剤師、研究者、技術者、産学官の諸分野で薬剤学に関心のある個人、あるいは団体から構成されている。薬学をとりまく環境は、大学などの教育機関、病院や薬局などの医療現場、製薬や関連企業、そして薬学に関連する官公庁でも、最近大きく変動しており、従前は正しかった行動や規範が現在では通じなくなっているものも多い。加えて、最近では多くの学会の会員数やアクティビティが右肩下がりにある。しかし、このような環境であるからこそ、薬剤学の真髄を見極め、境界領域を取り込み、さらにグローバル化を進めることによって、新しい時代にも進歩する日本薬剤学会を目指したい。

#### 2) 薬学を取り巻く変動

薬剤師養成課程が平成 18 年度から 6 年制となり、今年 4 月で 5 年目を迎え、平成 24 年 3 月には 1 期生が卒業することになる。また、今年度は新制度実務実習初年度を迎え、大学、病院、薬局では一大事業となる。社会はどのような人材を必要とし、一方、大学はどのような学生を巣立たせるか。薬学を取り巻くすべての人に、時代の生き証人となっていただきたいと思う。

おりしも、我が国の人口構成は逆三角形、高齢者の割合が増加し、若年者の比率が下がる。我が国で必要な薬学関係の仕事をいかに分担するのか。薬学には特に多い女性の寄与をさらに推し進める必要がある。薬剤学会では永井記念国際女性科学者賞が設立されたが、実務の部分でも男女共同参画をさらに推し進める必要があろう。また、我が国の人口そのものが減少する。売上は基本的に消費者の数に比例する。企業体を大きくするためには新しい消費者を掘り起こすか、合併するか、または消費者を海外に求めるしかない。薬剤学の真髄を見極めることにより、また、薬剤学との境界領域を取り込むことによって、付加価値をつけ商品（医薬品）の売上の増加に寄与できないか。重複するが、薬剤学はすべての人々の健康な生活を確保するための学問である。薬剤学は医薬品だけを考慮に入れた学問ではなく、診断医薬品や医療機器、さらには人の健康の維持を目的とする機能性食品や医薬部外品まで視野に入れた学問であるとすることもできる。我が国の自動車産業や家電産業が世界シェアで押されぎみの今、薬剤学が中心となり、科学立国である我が国の輸出産業のシードを見つけられないかと思う。もちろん、グローバル化も重要なテーマである。欧米だけでなく、近隣のアジア諸国との交流がさらに必要であろう。薬剤学会では FIP、CRS、AAPS などとの連携を進めてきた。また、アジアの薬学・薬剤学の進展のためにアジア薬学連合（AFPS）が 1 昨年発足し、薬剤学会の多くのメンバーが中心となった。薬剤学会のしている方向は間違っていないと信じている。

#### 3) 情報の共有

日本薬剤学会は 1985 年の設立後、4 半世紀を迎えた。この間、年会や各種セミナー・講習会・講座・シンポジウムを開催し、会誌を刊行し、また、広報委員会や将来ビジョン委員会などの多くの委員会活動を活発に行ってきた。しかし、会員相互の情報の共有はなににもまして重要である。対応領域をより深く、かつ広くすることは必要であるが、一方で、先に示した構成員全体が活動を理解し、広く連携をとっていくことが重要であると思う。これからは今までにまして、会員・構成員が情報を共有し、それぞれが日本薬剤学会の進歩に貢献・寄与できたらと思う。